

現代日本論概論「現代日本における家族」

第7講 人口と家族 (2): 結婚と出生

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 人口転換と低出生について、人口統計の基礎的な考えかたをおさえて理解する。

1 前回課題について

- 人口ピラミッドの全体的な形状とその背後にある社会状況 (ピラミッド型 釣鐘型 壺型)
- ベビーブーム (第1次、第2次) についての説明
- 男女差
- 人口転換の背後にある技術と慣習の変化

2 出生力 (fertility)

個人あるいはその集合体としての人口が産み出す出生の水準。

同様の用語として、「死力」「婚姻力」などがある

出生力を具体的に測定したものが各種の出生の指標 (普通出生率、総出生率、合計出生率など) である。

完結出生力 (complete fertility rate): 女性1人が、途中で死なない場合に、生涯に出産する子どもの数

純再生産率 (net reproduction rate): 世代 n の出生可能年齢時の人口を、その親世代 $n-1$ の出生可能年齢時の人口で割ったもの

3 人口転換のモデル

3.1 多産多死の社会

第1世代: 出生時 = 女 100万 + 男 100万
 出産可能年齢 = 50万 + 50万
 完結出生力 =

第2世代: 出生時 = 100万 + 100万
 出産可能年齢 = 50万 + 50万
 完結出生力 =

第3世代: 出生時 = 100万 + 100万
 ……

このように純再生産率が1になるときの完結出生力のことを、「置換水準」(replacement level) という。

3.2 多産少死の社会

$$\begin{aligned} \text{第1世代：出生時} &= \text{女 } 100 \text{ 万} + \text{男 } 100 \text{ 万} \\ \text{出産可能年齢} &= 96 \text{ 万} + 96 \text{ 万} \\ &\text{完結出生力} = 4 \\ \text{第2世代：出生時} &= \text{万} + \text{万} \\ \text{出産可能年齢} &= \text{万} + \text{万} \\ &\text{完結出生力} = 4 \\ \text{第3世代：出生時} &= \text{万} + \text{万} \\ &\dots \end{aligned}$$

3.3 少産少死の社会

$$\begin{aligned} \text{第1世代：出生時} &= \text{女 } 100 \text{ 万} + \text{男 } 100 \text{ 万} \\ \text{出産可能年齢} &= 96 \text{ 万} + 96 \text{ 万} \\ &\text{完結出生力} = \\ \text{第2世代：出生時} &= 100 \text{ 万} + 100 \text{ 万} \\ \text{出産可能年齢} &= 96 \text{ 万} + 96 \text{ 万} \\ &\text{完結出生力} = \\ \text{第3世代：出生時} &= 100 \text{ 万} + 100 \text{ 万} \\ &\dots \end{aligned}$$

3.4 出生力が置換水準を下回った (below-replacement-level) 社会

$$\begin{aligned} \text{第1世代：出生時} &= \text{女 } 100 \text{ 万} + \text{男 } 100 \text{ 万} \\ \text{出産可能年齢} &= 96 \text{ 万} + 96 \text{ 万} \\ &\text{完結出生力} = 1.5 \\ \text{第2世代：出生時} &= \text{万} + \text{万} \\ \text{出産可能年齢} &= \text{万} + \text{万} \\ &\text{完結出生力} = \\ \text{第3世代：出生時} &= \text{万} + \text{万} \\ &\dots \end{aligned}$$

3.5 人口ピラミッドと従属人口指数

出生力と死力についてさまざまなケースを想定し、人口ピラミッドと、人口年齢3区分 (前回資料) の比率を計算してみよう。

- ピラミッド型 (富士山型、三角形)
- 釣鐘型
- 壺型 (菱形、ダイヤモンド型)

従属人口指数 ((高齢人口 + 年少人口) / 生産年齢人口) が最も低いのはどれか? 長期的に考えると?

4 人口動態の指標

人口の変化をコーホートを追跡して観察するのは、長期間を要し、むずかしい。実際には、1年間の死亡・出生などのデータを利用して、そこから年齢構造の影響を除いたものを計算し、それを人口動態を表す指標として代用している。

- 平均寿命 (Life expectancy at birth) 出生から死亡までの期間の長さの平均を求める
- 合計 (特殊) 出生率 (total fertility rate) 各年齢に1人ずつしかいない社会を仮定して出生数を求める

これらは、年齢別出生数や「生存数曲線」のグラフにおいてどのように表現できるか?

5 第3次ベビーブームはなぜ起こらなかったか

- 第1次ベビーブーム (1947-49年出生コーホート) 「団塊の世代」
- 第2次ベビーブーム (1973年前後) 「団塊の世代」の子供
- その子供は?

1970年代中頃の人口ピラミッド (国立社会保障・人口問題研究所, n.d.) と年齢別出生率のグラフ (京極・高橋編, 2008, p. 36) を重ねて考えてみよう。

6 婚姻と出生

現代日本社会では、婚姻外の出生 (非嫡出子) はきわめて少ない。

法律上の婚姻が出生の事実上の前提になっていると考えることが多い

婚姻内出生力 (有配偶者に限定して計算される)

夫婦から生まれる子供の数 = 完結出生児数

7 未婚化・晩婚化

1960年以降の女性の未婚率の上昇と1980年以降の男性の未婚率の上昇 (教科書 p. 92)

生涯未婚率とは: (教科書 p. 92)

「平均初婚年齢」には2種類ある。

- 人口動態統計に基づくもの: その年に婚姻届を出した初婚夫婦のそれぞれの年齢の平均値
- SMAM (singulate mean age at first marriage): 未婚でいる期間の平均値。人口静態統計 (日本では国勢調査) の年齢別未婚率を使い、平均寿命と同様の方法で計算する。ただし、生涯 (ふつう50歳まで) 未婚の人口を除いて計算する。(教科書 p. 92 注1)

未婚化と出生力低下の関係ははっきりしない (コーホート観察のむずかしさ)。すくなくとも半分くらいは結婚の遅れが原因か?

文献

国立社会保障・人口問題研究所 (n.d.) 「人口ピラミッドデータ」 <<http://www.ipss.go.jp/site-ad/TopPageData/pyra.html>> 2013年5月31日閲覧。

京極高宣・高橋重郷 (編) (2008) 『日本の人口減少社会を読み解く: 最新データからみる少子高齢化』中央法規出版。